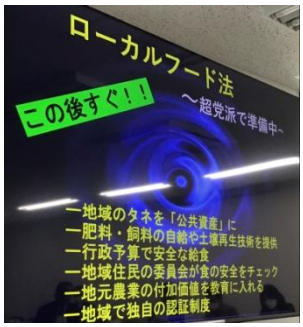
堤未果さん講演と質疑

4 月 23 日午後に開催された「背広ゼミ」京都研究会で、国際ジャーナリスト堤未果さんの講演と質疑に行った。写真はズームで講演する堤さんと宮本憲一先生ら。テーマは『デジタル・ファシズム』に続いて刊行された『ルポ　食が壊れる　私たちは何を食べさせられるのか』。

堤さんは本書を 1 時間にわたり、ビジュアルに分かりやく解説した。スライドを写真に撮りながら耳をかたむけた。国連の世界食料計画の世界的な食料危機への警告、ダボス会議の世界の「食糧危機」から話は始まる。

温暖化キャンペーン vs 食の主権、人口肉や昆虫食、ゲノム編集、バイオビジネスなどを説明。世界中の農家が激怒している様子をスライドに映す。写真の「牛が土壌を再生」に注目した。インドでは牛は循環の神様で、牛が農村を支えている。工業型の畜産牧場は共同体、環境、土壌の循環を無視する。土地を裸にしない、カバープロックという考え方。健康な土の上の動物は感染症にかからない、水田は生物多様性を維持する。

日本はバイオ食のトップランナ—である。規制が緩いので、外資が容易に参入できる。「食の主権」を求める声が世界的に拡大している。一方で、日本には世界でトップクラスの有機農業技術があり、有機食材が学校給食で活用されつつある。



写真のローカルフード法にも注目した。超党派の議員で準備中という。地域の種を「公共資産」と位置づけ、循環型自給をめざす取り組みである。「いただきます　ごちそうさま」という英語には翻訳できない自然観を日本社会で育んでいきたいと、話を締めくくった。

講演のあとの質疑では、まず宮本先生が「温暖化と農業」に対する重要な問題提起である。日本農業は 1970 年が転機であり、その後ますます深刻さを増している。農村が都市化して、農村社会が変質してしまった。農業再生には農村、農村社会(コモンズ)を再生する必要がある。

私の質問に対して、堤さんは「何を食べるか」だけでなく、「どう食べるか」が大切だ。食の主権とともに、食の主体のあり方が問われていると。示唆に富む講演と質疑であり、リアル参加して本当に良かった。

(2023年5月2日)